

第35回 道銀芸術文化奨励賞 音楽部門受賞

よこやま かなで し き
横山 奏 (指揮)

1984年5月生 札幌市出身／東京都在住

【略歴】

指揮法をダグラス・ボストック、尾高忠明、高関健、中村隆夫、黒岩英臣の各氏に師事。

2007年 北海道教育大学札幌校芸術文化課程音楽コース卒業

2014年 東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了

2015-2017年 東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員

2018年 「第18回東京国際指揮者コンクール」第2位&聴衆賞を受賞



©平館平

【近年の主な活動歴】

これまでに札幌交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、山形交響楽団、群馬交響楽団、東京都交響楽団、読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、パシフィックフィルハーモニア東京、東京佼成ウインド・オーケストラ、シエナ・ウインド・オーケストラ、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、千葉交響楽団、富士山静岡交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、中部フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪交響楽団、オオサカ・ション、兵庫芸術文化センター管弦楽団、広島交響楽団、九州交響楽団などと共に演を重ねている。

NHK-FM「石丸謙二郎の山カフェ」にシーズンゲストとして最多登場、登山とクラシック音楽の関連エピソードを紹介し人気を博している。

近年では、NHK大河ドラマ「光る君へ」「べらぼう」コンサートの指揮を務めるなど、活動の場が拡がっている。

第35回 道銀芸術文化奨励賞 美術部門受賞

びょういんあーとぶろじぇくと ひ の ま ひ ろ こ 代表 日野間 尋子(現代美術・社会実践)

1962年7月生 旭川市出身・札幌市在住



【略歴】

1984年 北海道女子短期大学工芸美術油彩コース専攻科修了

現在の所属：日本美術家連盟会員

収蔵：Art Museum of Iasi (ルーマニア) /釧路労災病院緩和ケア病棟

【近年の主な活動歴】

1986年より札幌、東京で個展、グループ展

2000-2006年 ドイツ、オーストリア、ルーマニアでのアートプロジェクトに参加。その間、芸術療法士（音楽/美術）との共同制作を通して「ケアとアート」の接点に興味を持つようになる。2004年 ザルツブルクアートフェア出品の際、滞在していたザルツブルク市内で、病院が会場となったアート展に出会い心動かされる。

2008年 札幌で任意団体「びょういんあーとぶろじぇくと」を結成

2010年 札幌ライラック病院が初めて外部へ向け解放したコンサート・アート展が実現。

町内会や患者家族から「地域に開かれた活動」と好評を得る。

2013年 「庭で耳を澄まして」展より、趣旨と企画に賛同した絵画、造形作家が活動に加わるようになりアート作品展示の他、コンサートやダンス、ワークショップ等、毎年、分野と内容を更新しながら病院をコミュニティーのひとつとして捉える取り組みを継続。院内アトリエの設置。(札幌ライラック病院)

2015年 札幌ライラック病院、北海道がんセンターで同時開催「ひかりの庭」展

2016年 市立札幌病院、天使病院と展示を拡げる

2016年 第40回日本死の臨床研究会年次大会にてワークショップ

2016年 アートミーツケア学会にて分科会「ケアの現場におけるアートの可能性」

2017年 「びょういんあーとぶろじぇくとの仲間たち」展 (黒い森美術館)

2019年 第24回日本緩和医療学会学術大会にてポスター発表

2019年 第57回日本癌治療学会学術集会にてポスター発表

2019-2023年 コロナ禍を経験しながら医療の場をこころの通った温もりの感じられる人間らしい空間に近づけようと美術家17名による5回の展覧会とイベント開催。

2023年 「びょういんあーとぶろじぇくと展」(札幌文化芸術交流センター)

2024年 第47回日本死の臨床研究会年次大会にて「館内アート」を担当。「つらさやかなしみを持つ人々のそばにあるアート」をテーマに11名の美術家が共同制作に取り組み作品展示。シンポジウムに於いて、アートは人と人を結びつける。アートは行動の変化を促す。アートは希望を見いだそうとする行為でもある。3つの視点からアートの役割と可能性についてを考察。

2024年 アートミーツケア学会にて分科会「死の臨床現場での実践からアートの役割と可能性」

2024年 「旅する星」展(札幌ライラック病院)

2025年 「とどける・むすぶ」展(札幌ライラック病院)

2025年 論文：小田浩之・日野間尋子「緩和ケアに通じるホスピタルアート—その経緯と指向性」,緩和ケア 35(5):377-383,2025

「びょういんあーとぶろじぇくと」は「アートを用いることで病院で過ごす方々の心や身体にどのような変化が生ずるか」「アートが人間にもたらす力とは何か」に注目し、これまでに約30名のアーティストと道内5か所の医療機関で23回の展覧会と関連イベントを開催している。(2025年11月現在)